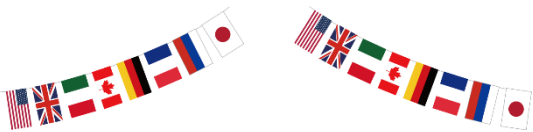


スポーツおじいさんにないたい！⑥



『レイジング・ブル』

國友万裕



1. 昔話に花が咲く

最近になって、控え室である女性の先生と昔話に花が咲いている。

その女の先生とはコロナの前から、控え室でお会いしていて、ちょっとした世間話はしていた。どうやら、西宮の K 大学の出身であることは話していて感づいていた。

俺も実は博士課程は K 大学に入っていたのだが、大学院の博士課程ということになると週に 1 回しか行かなくていい。だから、俺は京都から通っていて、K 大学にはただ在籍していただけのことで、たいして何もしていない。あそこの大学の学生だったという意識すらないのだ。

だから K 大学のことは触れたこともなかったのだが、つい先日話の流れで、いや、「実は僕も大学院は K 大学に行っていたんですよ」と話すことになってしまった。

「あ、そういえば、國友という名前どこかで聞いたことがあると思っていた」とその先生。

彼女は俺よりも 5 歳くらい年下みたいだった。そのため、共通の知り合いはいるのだ。全く重なるわけではないが、一部は彼女も知っているのである。

俺が S さんという俺と同期だった女性のことを口にしたところ、「ああ、彼女は、5 年くらい前に和歌山に帰られたんですよ。それまでは公団で猫を飼って暮らされていたんだけど、お母さんかなんかの介護があるみたいで」

「彼女はもう 30 歳くらいの頃から研究職を離れるとか言っていましたものね。」

「ええ、なんか大学院の間に失望するようなことがあったみたいで」と彼女。

Sさんは、博士課程の頃はバリバリに勉強しているという雰囲気の人で、絶対に専任になって、大学で勤め上げるタイプの人だと思っていたのだが、30くらいから非常勤でどうにか生活は続けるけども、もう研究職にはつかないと言っていると聞いていたのである。彼女とは大阪の近畿大学で非常勤していた頃、ちょっとだけ一緒だったけれど、もう30年も会っていない。

「僕が一番親しいのは、関東の大学に就職したYさんで、彼女の旦那さんにもお会いしたことあるんですよ。もう10年くらい前だけど、僕の本が出た時に、彼女の大学に講演に呼んでくれたこともあるんです」

他にも何人もの人の名前が上がった。

「Tくんなんかは、今でも非常勤はやっていますけど、彼は若い頃から、『俺はもう野垂れ死ぬ』とか言っていたみたいだから」

「大学院生はみんなそう言っていましたよね」と彼女。

そうなのだった。大学院なんて普通の人には行かない。しかも博士課程ということになれば、もうみんな30近くになってしまっている。そこまで来て、何も先が見えないということになると「野垂れ死しかねえか」という気持ちにもなるのだ。

実際、俺の同期だった人の中には、40歳になる前に統合失調症になってしまった人もいた。

俺は、これまで専任職には就けなかったけど、どうにか細々と非常勤でここまで来れた。非常勤とは言っても、俺の教えている大学は、条件のいい大学ばかりだ。本も4冊出せた。結構恵まれていたのかもしれない。

人生なんて、下駄を履くまでは本当にわからないのだ。順調に出世コースを歩んで

いるように見えた人が40代の若さで亡くなったり、大病で辞めていったりする姿をこれまで見てきた。

人生なんて、本当に悲しいのである。そして、今俺は人生の終活の時期に入ろうとしている。終活とは思いたくないけれど、もう気力も体力も相当落ちてきている。元気でいれるのはあと15年くらい。その後はボケ老人という可能性が高いのである。

2. AIに翻弄される日々

この3ヶ月間を振り返って何が起きただろうか。

これと言って、何も起きていないのだ。中村雅俊の歌で、何気ない毎日が風のように過ぎていく□という歌が大昔にあったけれど、俺の場合は何気ない毎日ではなく、老いての生き方を模索する毎日が延々と続いている。

7月に1日だけ、仕事を休んでしまった。あまりにも体がしんどいので、後で補講すれば1日くらいは許されるだろうと病院に行った。そこで血液検査を受けた。その後、検査の結果を聞くために再び病院に行くと身体は全く問題はない。

おそらく過労なのだ。俺は歳の割に仕事をし過ぎている。しかし、お金がない以上は仕方がない。これから老後のためのお金も貯めなくてはならないのだ。俺は国民年金の他に国民年金基金も払ってきたが、それでも上乗せ額はしれている。月に7万くらいしか入らないわけだから、それだと生活はできないのだ。

このところAIに翻弄される日々が続いている。先日、突然マンションのWi-Fiの

調子が悪くなったかと思ったら、次はプリンターの調子が悪くなった。そうかと思うとスマホの充電コードがまだ半年も経っていないのに調子が悪くなってきて、買い換えざるを得なくなった。本当にこの頃はデバイスに振り回される毎日である。

大学でも、何から何までAIでできちゃうため、もう教育も成り立たなくなっていくのではないかと懸念されている。レポートも翻訳も何もかもAIがやってくれる時代なのである。しかも今はAIの性能がいいので、先生に疑われないように「大学生のレポート」ふうのレポートを作成することも可能だし、もっと高度なレポートを作成することも選択できるようになってきているとのことである。

恐ろしいような時代である。昔からメアリー・シェリーの『フランケンシュタイン』など、自分の作った機械に破壊される人間を描く話はあったけれど、それが本当に現実になってきたのだ。毎日がSF映画の世界になってきたのである。

3. レンドルミン依存を乗り越えるために

このところ心の調子が悪い。忙しいのは忙しいで辛いのだが、夏休みや春休みなど、暇で何もすることがなくなるとそれはそれで気分が悪くなる。

一つには半年くらい前から、60代になったから自分史を書こうという気持ちになってしまった。これが原因のようである。自分史を書こうと思って、あれこれ過去のことを思い出していると、嫌なことが想起されてきて気分が悪くなっていくのだ。

自分史はしばらくお預けにしようかとい

う気持ちになってきた。過去のことは忘れた方がいい。思い出して都合のいいところだけ思い出せばいいのかも知れないのだ。自分にとって都合の悪い過去を思い出したって仕方がない。誰も幸せにはならないのである。

自分にとって都合のいいようなふうに過去を解釈する。それは悪いことではない。それくらいのご都合主義は許される。誰にも迷惑はかけないのだから。

先日、心療内科に行って、係つけの先生から眠剤は多めに飲むと後で保険がきかなくなるから」と釘をさされた。

俺のもらっている眠剤は、もう31年も飲み続けているレンドルミン（プロチゾラム）というやつである。俺はおそらくレンドルミン依存症になっているのだ。俺はレンドルミンがなくなると1日も眠れないのだ。30代の終わり頃は、寝る前1錠で済んでいた時期もあった。1錠を半分に割って、半錠で済んでいたことすらあった。しかし、今は上限の2錠はなかったら絶対に眠れない。

40代になって仕事が忙しくなり、50代になると仕事が忙しいのがデフォルトになってしまった。そして60になってくると仕事の忙しさは変わらないのに、体力が落ちているため、家に帰るとヘトヘトになってしまい、早くに寝ようと夕方にレンドルミンを飲んでしまう。しかし、早い時間に飲んでも眠れない。結局、朦朧と眠気が差したような状況で夜を過ごすことになる。そして就寝の時間になるとレンドルミンの効果が切れてしまっているのだ。レンドルミンは睡眠薬ではなく入眠剤であり、寝つきをよくするものだから、早めに飲み過ぎるのは問題なのである。

思い切って、薬を変えてみようかとも思った。レンドルミンは長くたくさん飲んでいるとそれが普通の状況になってしまい、抗体ができあがってしまうのだと聞いたことがあったからである。

とは言っても、30年以上もつきあってきたレンドルミンと一気におさらばするのは難しい。それから闘いが始まった。

8月8日（金曜日）

心療内科に行った後、映画を見に行った。アップリンク京都で見たのは『アイム・スエイル・ヒア』である。これは今年のアカデミー賞でフェルナンダ・トーレスが主演女優賞の候補になって、注目を浴びたブラジル映画である。

この女優さん、日本人には馴染みが薄いけど、『セントラル・ステーション』（1998）という映画で同賞にノミネートされたフェルナンダ・モンテネグロの娘さんなのである。あの映画は傑作だった。思えば、あれから30年近い月日が流れているのだ。俺はずっとその間、同じような生活を繰り返している。

その間に起きた出来事といえば、2度にわたる社会運動団体との確執。弟の死。4冊単著を出したということ。当時は専任教員になることを目指していたのが、もうそれは諦めて、非常勤を貫こうという気持ちになったこと。非常勤の仕事自体は恵まれるようになったこと。クリスチャンになったこと。アメリカ南部に行ったこと。ボクシングを始めたこと。ピアノを始めたこと。あれこれ起きてはいるのだ。しかし、振り返ったときに、さまざまな出来事が昨日のここのように思い出されるため、30年近い年月が

3年ぐらいのことにしか思えないのである。

この日の夜、初めてレンドルミンではない眠剤を飲んだ。エスゾピクロンというやつで、すぐに眠気が襲ってくるわけではないが、いつの間にか眠ってしまっていた。

これからはこれに変えていって、レンドルミン依存を減らしていかななくてはならない。

8月9日（土曜日）

この日は昼間、久しぶりにボクシングジムに行った。1か月半ぶりくらいである。俺の方が忙しかったのと、トレーナーの教え子も病気したりしていたので、なかなか合う時間がなかった。

その後、出町座に出て、『見える子ちゃん』を見た。これはいかにも若い子向けの映画だが、知り合いの先生が見てそれなりによかったとおっしゃっていたので、暇つぶしようである。

この日もどうにかエスゾピクロンのみで眠れた。

8月10日（日曜日）

日曜日なので、朝から同志社教会に礼拝に行った。また例によって体がだるい。聖歌隊の練習と礼拝が終わった後、烏丸今出川のコメダ珈琲店でランチ。その後一旦は家に帰った後、することがないので、またすぐに201番のバスで、出町柳に向かい、LION KITCHEN でバナナケーキを食べた。そして、その後同志社寒梅館で、グリークラブの交歓演奏会を聴きにいった。同立演奏会なので、同志社と立命館の演奏会と思う人もいるかもしれないが、同志社と立教である。

音楽系の学生のする演奏会というのは意外に長くて、最初から最後までいれないという気持ちになることがある。ところが、こ

れは2時間以内におさまるものだったので、疲れることなく、ゆっくりと聞けた。やはり、時間は程よい方がいいと思ったのだった。3日目のエスゾピクロンも大丈夫だった。

8月11日（月曜日）

朝起きてみると足が動かない。土曜日にボクシングのトレーニングでステップをしたため、その凝りが2日も経ってから出てきたのだ。前日の日曜日は別にどうもなかったのに。朝からリラクルでマッサージを受けた。その後、『近畿のとある場所で』という映画を見る。そして、『テルマ 93歳のやさしいリベンジ』をU-NEXTの高額レンタルで見た。これは面白い映画だった。主演の女優さんは、これまで舞台で活躍してきた人とのことで、映画では『アバウト・シュミット』のジャック・ニコルソンの奥さん役でチラッと出てきたことくらいしか覚えていない。しかし、彼女90代になって、おそらくこれが映画初主演で、立派に主演女優を務めている。俺もこんなふうになればいいけど、難しいだろうなあ。30年後の自分なんて想像もつかないのだ。

この日は、ついに耐えられず、レンドルミン半個、追加して飲んでしまった。1日1個くらいだったら飲んででもいいと頓服でもらっているのだから、これくらいはいいかと判断したのだ。

それにしても時間が潰れないなあ。

8月12日（火曜日）

まだ足が上手く動かない。行きつけのイタリアンレストラン MIZO で食事をした。その後、アップリンクで、アイルランドの映画『ニーキャップ』を見たが、乗れず。

この日もまたエクソピクロンで眠ること

はできたものの、早くに目が覚めてしまい、またレンドルミン半個追加で飲んでしまった。

8月13日（水曜日）

MOVIX 京都で『木の下の子』を観た。毎年8月になると戦争をテーマにした映画が公開になる。これもよくあるパターンの映画だ。ボーッとして観ていてもそれなりに頭に入ったので、きっと出来はいい映画なのだと思うが、何せ、この歳になるともう昔みたいな意欲的な見方はできなくなってくる。

終わった後、丸善で早矢仕ライスを食べた。ハヤシではなく早矢仕と書いているところが昭和レトロである。街はお盆休みで幸せそうな家族連ればかり。俺は気が滅入るのだった。

そして、また我慢できなくなって、レンドルミン半個を昼間に飲んでしまった。しかし、眠れず。これが俺の悪いところなのだ。

先にも書いたとおり、起きているとしんどういので、ちょっとだけ寝るかという気持ちになって半分だけ飲むのだが、実際には眠れない。体がボーッとなるだけである。それで生活のリズムが崩れていくのだ。

8月14日（木曜日）

今日はもう見たいと思う映画も尽きてしまった。

U-NEXTで『アンフィニッシュ・ライフ』（2005）という映画を見る。これまでこの映画の存在に気がついていなかった。もう20年も前の映画なのだが、日本では劇場公開されなかったみたいで、ほとんど話題にならなかったはずである。

ロバート・レッドフォードとモーガン・フリーマン、ジェニファー・ロペスとキャスト

イングは豪華である。アメリカの田舎で暮らすレッドフォードとフリーマンの関係が面白い。周りからゲイかと疑われるような関係であることが台詞で示唆されるのだが、そうではなく、ただの友達で、隣人という設定である。

とは言うものの、レッドフォードがフリーマンの体の介護をする場面が出てくる。これは新しい展開だと思ったものだった。これまでケアするのは女性、ケアされるのが男性という構図が映画の世界では染み渡っていたからである。しかも、白人と黒人の男のカップリング。これはひょっとすると同性愛に見せないための策略という言い方もできる。異人種の男同士の関係は肌の色の違いが強調されるため、白人同士・黒人同士の場合に比べて、同性愛的な匂いが消えるという説は前から存在するのだ。

ついこの頃になって、「ケア労働」の本をいくつか読んでいる。この頃は現実にもケア労働がクローズアップされるようになってきている。介護やマッサージなど、人のケアする労働はこれからは重要度を増していくからである。

確かにケア労働はまだまだ女性が多い。それは一つにはケア労働はお金にならないから、主収入を稼がなくてはという責任を背負った男性にとってはケア労働は付きたくても付けない職業なのである。

この映画から 20 年経っているのに、それをどうにかしなくてはという社会の意識は大して進歩しているようにも思えないのだった。

8 月 15 日（金曜日）

今日は未明に目が覚めた。

仕方がないからまたレンドルミン半錠、

しばらく寝るけどまた目が覚める。また半錠。そして、昼過ぎになってまだ眠気がおさまらないから、またもう一度寝ようかとまた半錠飲んで、また眠れない。

本当にレンドルミンとの闘いは難儀である。飲みたいけれど、飲んだらオーバードーズになってしまう。しかし、起きていると苦しい。この苦しみがある程度は乗り越えれば、普通になるのかも知れない。

母からは「ボーッとしていなさい」と言われるのだけど、そのボーッとするやり方を忘れてしまっている。

Amazon で注文しておいた『渾身』の DVD が届いた。これは前から気になっていた DVD。高かったのだが、スポーツ映画研究をしようと思っているので、これくらいの失費は仕方がない。島根を舞台にした相撲の話である。

そして、夜、またリラクルに行ってしまった。

見たい映画も残念ながら、あまりないのだ。終戦記念日だから仕方がないのだけど、映画もこの時期に封切られるやつは戦争がらみが多く、気が重くなりそうなものばかり。俺は自分の心と戦争していて、まだ戦争は終わっていないのだ。その上に戦争の話なんて食指が動かないのである。次に心療内科に行くのは 27 日。あと 12 日後だ。それまでどうにか今持っている薬で過ごせるだろうか。

4. 京都暮らし、43 年経って

先日、役所から葉書が来て、名前のフリカナを確認してくれという趣旨のものだった。俺は「万裕」と書いて「カズヒロ」と読

むのだが、まず、そう読んでくれる人はいない。むしろ「まゆ」と読まれてしまう。学生からも女の先生かと思っていたと言われることがしばしばある。

実は、これ、俺は前から悩んでいたのだ。

もう 25 年以上前だが、ジェンダーの活動をしていた頃は「まゆ」の方が今風でいいんじゃないのと言われていた。男か女かわからないから、その方が時代に合っていると。実際、学生たちの名簿を見ていると着々と男か女かわからない名前が増えている。

名前の振り仮名は簡単に換えることができると聞いていた。この際だから「まゆ」に換えてしまおうか。でも、そんな簡単に換えていいのか。一方で、この頃凹みモードなので、名前を変えれば心機一転できるかも知れないという気もする。新たに生まれ変わるにはいいかも知れないのだ。

夏休みで暇があるので、滋賀の國友村に行こうかと思ったこともあった。國友鉄砲は結構京都では有名である。実家のルーツであることは間違いないからなのだ。しかし、「國友」という名字は、俺はあまり好きじゃない。国の友達なんて右翼的な感じがするからなのである。名前の読み方は簡単に換えられるけど、どこかに養子にでもならない限りは、苗字は簡単には換えられない。

でも自分のルーツだから、一度は行ってみようかという気持ちもあって、FB で國友鉄砲ミュージアムにも繋がっていた。ただ、京都からだだと 2 時間半くらい電車にかかるみたいだ。おそらく、周りは何もないような小さな村みたいところだと思う。そんなところに、この暑い盛りに 2 時間半もかけていく必要があるのだろうか。過去は断捨

離したほうがいいのかも知れないとも思うのだ。

考えてみると俺の生活は学生の頃から 40 数年間、ほとんど変わっていない。前に弟から「一貫し過ぎだ」と言われたことある。他の人からも「味のしなくなったチューイングガムを噛み続けているような人生だ」と言われたこともあった。

考えてみると、色々な人が俺の人生にやってきては去っていった。東京に去っていったロースクールの学生さん、東京に移って行った鍼灸の先生、そしてかつての教え子たちも東京に去っていった。

もう永遠に会うこともないだろう。

それは仕方がないことでもあるのだ。俺だって、大学院の頃の鈴木重吉先生にはものすごく感謝していた。鈴木先生は元々北海道の人で、その後、東京の大学の先生になられて、毎週、東京から京都に来て、ホテルに泊まって、大学で教えられていたのだが、俺が 30 歳の時に退官になられた。その時、研究室の片付けの手伝いに行ったのが最後にお会いした日だった。

それから 8 年後、俺が 38 歳の時にその先生は亡くなった。その間、その先生のことを嫌いになった訳じゃない。ただ、一旦、住む世界が変わってしまうとそうそう会うことは無くなってくるのだ。

それにしても大抵の人は、東京に行ってしまうなあ。京都は就職先が少ないのが一つの原因だ。東京だったら仕事はいくらでもある。

都道府県イメージ調査が毎年発表になるが、いつだって、1 位は北海道、2 位は京都、3 位は沖縄になる。暮らしたいというよりも、観光で行きたいと思うようなところが、

ランキングの上に来る。やはり、京都は一時滞在の街なのである。そこに40年以上も住んでいる俺は、京都に住む変な爺さんなのかも知れないのだ。

しかし、故郷で深い傷を負わされた俺は故郷を自分の死に場所にはしたくない。東京に行きたい気もするけど、東京に出ても何も当てはない。東京だったら余計に物価が高くて、生活は苦しくなる。どうにか京都に自分の眠る場所を探さなくてはならないのだ。

5. 『レイジング・ブル』(マーティン・スコセッシ監督・1980)

本当に45年ぶりくらいで、再見した。

この映画が公開になった当時は、俺は不登校で苦しんでいた。まだ何も前が見えなくて、通信制の高校に移っても、希望は見えない。暗中模索の日々だった。そんな時、映画だけが支えだった。この映画を見たのは17歳の時である。ロバート・デ・ニーロがこの映画でアカデミー賞主演男優賞を獲得した。

この映画、今見直してみると主人公デ・ニーロと弟ジョー・ペシの関係が同性愛的なものになっていることがわかってきた。

「俺を殴ってくれ」というセリフがでてきて、ペシがデ・ニーロの横っ面に何回かパンチを食らわせる。それがデ・ニーロの方は快感なのである。この男が男から殴られるということが快感につながっていくことは『ファイトクラブ』などでも描かれてきたことである。

日本映画の『生きててよかった』というボクシング映画も見したが、この映画では主人

公が殴り合う場面と女性とのセックスの場面がモンタージュされる。すなわち、男は殴られるとセックスしているような快感を感じるもののメタファーなのである。

俺もボクシングジムに行くと自分の男性性を発散できる。俺はもっと若い時期にこういう経験をすべきだったのだ。

しかし、運動神経ゼロだった俺はそれができなかった。

思えば、昭和はバカの時代。人の心に対する理解が全くなかった時代なのだ。苦手な子がスポーツをするのが辛いと思うのは当たり前のこと。できない子を怒ったりしたら、余計に苦手意識を植え付けることも当たり前のこと。そういう当たり前のことを理解していない、バカな大人が多かったのである。

今だったら、昔の先生たちは首だろう。

今となってはどうすることもできないことばかりが、胸に去来していく。いつになったらこのループから抜けられるのだろうか。

今回はちょっと暗い話になってしまいました。。。(笑)